秋田県

研究協力校（課程又は障害種）

・秋田県立比内支援学校（知的）
・秋田県立比内支援学校かづの校（知的）
・秋田県立比内支援学校たかのす校（知的）
・秋田県立大曲支援学校（知的）
・秋田県立大曲支援学校せんぼく校（知的）

研究の成果

観点１：
各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

1-1.　県教育委員会担当者の計画訪問等による指導・助言

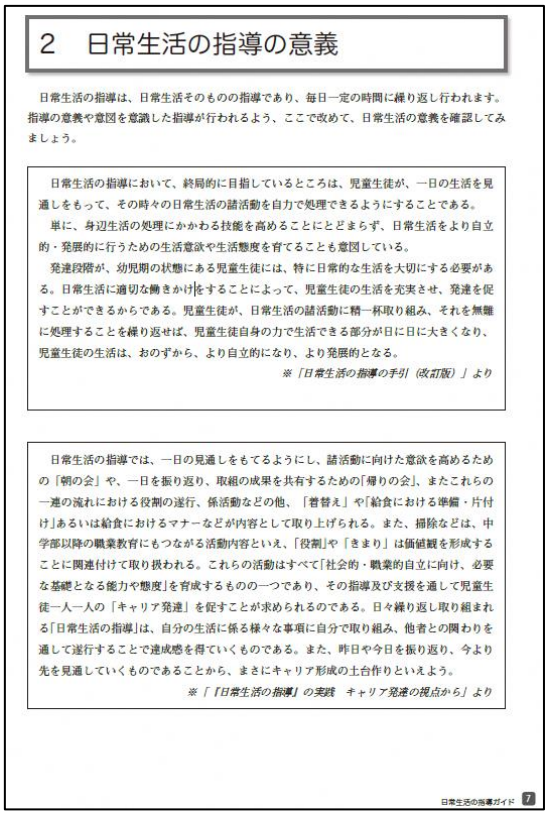
秋田県では、大きく２つの研究テーマを設定し、実践研究を行った。第一に、社会に開かれた教育課程をテーマとして設定し、研究協力校の１つである秋田県立大曲支援学校せんぼく校（以下、「せんぼく校」）が担当した。第二に、その他の研究協力校については、主体的・対話的で深い学びをテーマとして設定し、実践研究を行った。

各校間の研究の方向性の共通認識を促すため６月から７月にかけて、県内全ての特別支援学校で実施している、県教育委員会の指導主事による計画訪問において、各校での実践研究に関する聞き取りや指導・助言を行った。また、夏休みの時期に、県教育委員会主催の教育課程協議会を設けた。各校の副校長や教頭、分掌主任がそれらに参加することで、学習指導要領の改訂のポイント等に関する理解が広がった。また、本分校委託研究推進委員会等の組織も、共通理解に基づく研究推進のために効果的に活用された。

1-2.　日常生活の指導に関するガイドブックの作成

上記に加え、各特別支援学校の代表者による、授業改善のプロジェクトチームを作って日常生活の指導の授業改善に関する検討を行った。その成果として、「各教科等を合わせた指導」の基礎・基本として、新学習指導要領に基づき、小学部「生活科」や中学部「職業・家庭科」などの各教科等の内容との関連を意識した授業づくりの理解を深め、各担当者の自校における実践の充実につなげることができた。これらの成果を集約した「特別支援学校　日常生活の指導ガイド」（資料１）を作成し、県内の特別支援学校に配付した。本ガイドブックでは、知的障害教育における指導の特徴や日常生活の指導の意義や特徴、日常生活の指導

の評価に関する事項に加え、小学部から高等部及び重度・重複障害のある児童生徒の日常生活の指導に関する留意点と実践事例が掲載されている。



2　日常生活の指導の意義

日常生活の指導は、日常生活そのものの指導であり、毎日一定の時間に繰り返し行われます。指導の意義や意図を意識した指導が行われるよう、ここで改めて、日常生活の意義を確認してみましょう。

日常生活の指導において、終局的に目指しているところは、児童生徒が、一日の生活を見通しをもって、その時々の日常生活の諸活動を自力で処理できるようにすることである。

単に、身辺生活の処理にかかわる技能を高めることにとどまらず、日常生活をより自立的・発展的に行うための生活意欲や生活態度を育てることも意図している。

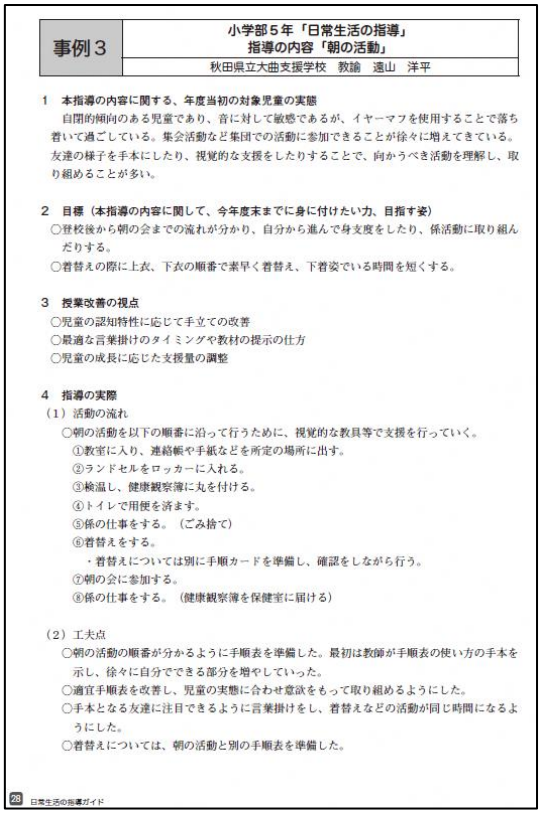
発達段階が、幼児期の状態にある児童生徒には、特に日常的な生活を大切にする必要がある。日常生活に適切な働きかけをすることによって、児童生徒の生活を充実させ、発達を促すことができるからである。児童生徒が、日常生活の諸活動に精一杯取り組み、それを無難に処理することを繰り返せば、児童生徒自身の力で生活できる部分が日に日に大きくなり、児童生徒の生活は、おのずから、より自立的になり、より発展的となる。

※『日常生活の指導の手引（改訂版）』より

日常生活の指導では、一日の見通しをもてるようにし、諸活動に向けた意欲を高めるための「朝の会」や、一日を振り返り、取組の成果を共有するための「帰りの会」、またこれらの一連の流れにおける役割の遂行、係活動などの他、「着替え」や「給食における準備・片付け」あるいは給食におけるマナーなどが内容として取り上げられる。また、掃除などは、中学部以降の職業教育にもつながる活動内容といえ、「役割」や「きまり」は価値観を形成することに関連付けて取り扱われる。これらの活動はすべて「社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度」を育成するものの一つであり、その指導及び支援を通して児童生徒一人一人の「キャリア発達」を促すことが求められるのである。日々繰り返し取り組まれる「日常生活の指導」は、自分の生活に係る様々な事項に自分で取り組み、他者との関わりを通して遂行することで達成感を得ていくものである。また、昨日や今日を振り返り、今より先を見通していくものであることから、まさにキャリア形成の土台作りといえよう。

※『『日常生活の指導』の実践　キャリア発達の視点から』より

日常生活の指導ガイド 7



事例３	小学部５年「日常生活の指導」 指導の内容「朝の活動」 秋田県立大曲支援学校　教諭　遠山　洋平

1　本指導の内容に関する、年度当初の対象児童の実態

自閉的傾向のある児童であり、音に対して敏感であるが、イヤーマフを使用することで落ち着いて過ごしている。集会活動など集団での活動に参加できることが徐々に増えてきている。友達の様子を手本にしたり、視覚的な支援をしたりすることで、向かうべき活動を理解し、取り組めることが多い。

2　目標（本指導の内容に関して、今年度末までに身に付けたい力、目指す姿）

○登校後から朝の会までの流れが分かり、自分から進んで身支度をしたり、係活動に取り組んだりする。

○着替えの際に上衣、下衣の順番で素早く着替え、下着姿でいる時間を短くする。

3　授業改善の視点

○児童の認知特性に応じて手立ての改善

○最適な言葉掛けのタイミングや教材の提示の仕方

○児童の成長に応じた支援量の調整

4　指導の実際

（1）活動の流れ

○朝の活動を以下の順番に沿って行うために、視覚的な教具等で支援を行っていく。

①教室に入り、連絡帳や手紙などを所定の場所に出す。

②ランドセルをロッカーに入れる。

③検温し、健康観察簿に丸を付ける。

④トイレで用便を済ます。

⑤係の仕事をする。（ごみ捨て）

⑥着替えをする。

・着替えについては別に手順カードを準備し、確認をしながら行う。

⑦朝の会に参加する。

⑧係の仕事をする。（健康観察簿を保健室に届ける）

（2）工夫点

○朝の活動の順番が分かるように手順表を準備した。最初は教師が手順表の使い方の手本を示し、徐々に自分でできる部分を増やしていった。

○適宜手順表を改善し、児童の実態に合わせ意欲をもって取り組めるようにした。

○手本となる友達に注目できるように言葉掛けをし、着替えなどの活動が同じ時間になるようにした。

○着替えについては、朝の活動と別の手順表を準備した。

28　日常生活の指導ガイド

資料１　「特別支援学校　日常生活の指導ガイド」（p. 7、p. 28 より引用）

観点２：
教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2.　「せんぼくいきいきプロジェクト」（秋田県立大曲支援学校せんぼく校）

社会に開かれた教育課程を研究テーマとする「せんぼく校」は、観光地である仙北市の市街地に平成 28 年度に開校した学校である。「せんぼく校」高等部では、立地条件を生かし仙北市の観光に特化した、学校設定教科「観光科」を設定している。

この観光科では、仙北市の観光や地場産業に関する基礎的な知識と技術の習得を図ること、観光の意義と役割の理解を深めることを通して地域を知ること、観光に関わることを通し、社会生活に必要な能力と実践的な態度を育成することを目標とし、仙北市の観光資源を最大限学習に取り入れ、地域と連携した学習を展開している。

これに伴い、各学部を貫いて、地域の観光資源を教材として用いて学習を行う地域貢献活動「せんぼくいきいきプロジェクト」（資料２）を実施した。「せんぼくいきいきプロジェクト」では、「地域が教室」を共通テーマに、各学部で「地域に触れる」（小学部）「地域に踏み出す」（中学部）「地域に役立つ」（高等部）というテーマを設定し、小学部から地域の観光資源等について学習できるように教育課程を編成した。

資料２　「せんぼくいきいきプロジェクト」

観点３：
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

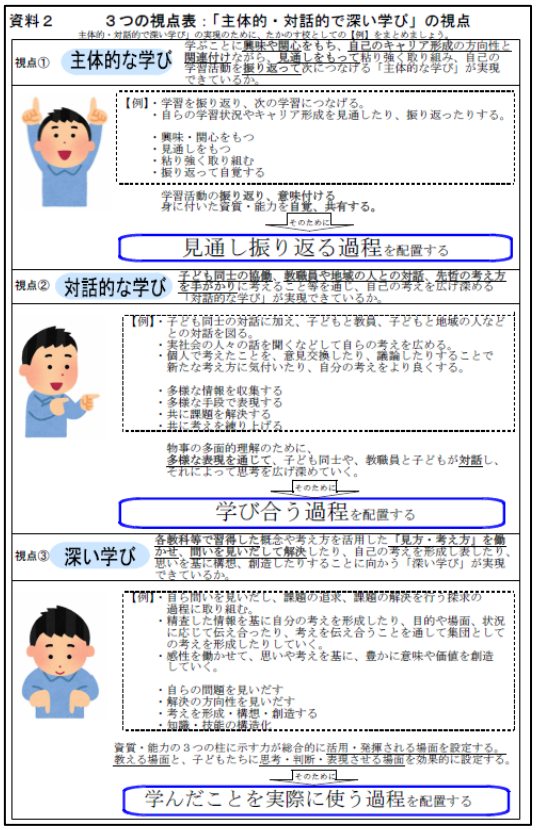
3.　「たかのす校スタンダード」（秋田県立比内支援学校たかのす校）

各研究協力校において、県教育委員会による「授業デザインチェックリスト・授業実践チェックリスト」（授業づくり・授業改善のためのチェックリスト）や自校の授業実践に基づき、各校の実態に合わせた「授業・単元づくりのポイント」や「授業チェックリスト」等が作成された。中でも、秋田県立比内支援学校たかのす校（以下、「たかのす校」）は、チームでの授業づくりのツールとして、「たかのす校スタンダード」（授業づくりの基礎・基本となる資料をまとめた冊子）を作成している。

「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた授業改善のために、従来のスタンダードの内容に「主体的・対話的で深い学び」の視点による「3 つの視点表」（資料 3）を加えてまとめた。まず、視点①「主体的な学び」として、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりすることが出来るように、見通しを振り返る過程を配置すること。視点②「対話的な学び」として、子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方等によって自己の考えを広げ深めることができるよう、学び合う過程を配置すること。視点③

「深い学び」として、各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして課題の解決を行う探求の過程に取り組むことができるよう、学んだことを実際に使う過程を配置することの３点が設定されている。

これらの視点で授業づくりがなされているか、「振り返りシート」を用いて各教員が振り返った。各教員が記入した「振り返りシート」をもとに、「児童生徒が自分の力を発揮するために有効だった学習活動、環境の工夫」（資料４）を一覧にまとめた。



資料３　「３つの視点表」

資料４　学習活動・環境の工夫

観点４：
障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4-1.　「絆プロジェクト」（秋田県立比内支援学校たかのす校）

研究協力校である秋田県立比内支援学校本校・分校ともに、「街は大きな教室だ」を合言葉に、地域との共催行事や交流及び共同学習を実施している。

「たかのす校」では、地域に根ざし、地域と共に生きる教育活動を「絆プロジェクト（地域学習）」として教育課程の柱に位置付け、展開した。各学部で、「わいわいプロジェクト」（小学部）「みんなのためにプロジェクト」（中学部）「絆プロジェクト」（高等部）として名称を設定し、それぞれの学部で学校間交流や、地域での清掃ボランティアなどを通じて交流

及び共同学習に取り組んだ。また、各学部段階において、「自分」の役割をやりきる経験（小学部）→「みんな」の中で役立つ経験（中学部）→「地域」の一員として生きていく自信（高等部）を大切にしたいこととして設定することで、学部間のつながりを意識した取組がなされている。

4-2.　「りんごプロジェクト」（秋田県立比内支援学校かづの校）

秋田県立比内支援学校かづの校（以下、「かづの校」）では、本事業以前から行っていた、地域を活用し、りんごの栽培等について年間を通して学ぶ「りんごプロジェクト」を、学部間のつながり（縦のつながり）と地域貢献活動による地域とのつながり（横のつながり）を意識して全体構想を明確化した。

とりわけ、高等部では、生徒全員で「リンゴレンジャー」としてショーを作り上げていく単元を設定した（資料 5）。ショーは、地域の保育園やイベント、学習発表会等で開催される。平成 29 年度は「リンゴレンジャー」の活動の 4 年目であり、平成 29 年度研究紀要では、「ショーが完成するまでの演技から演出、大道具、台本の製作まで生徒一人一人が役割を担って行うことができるようになってきた。」という成果が挙げられている。

資料 5　リンゴレンジャー

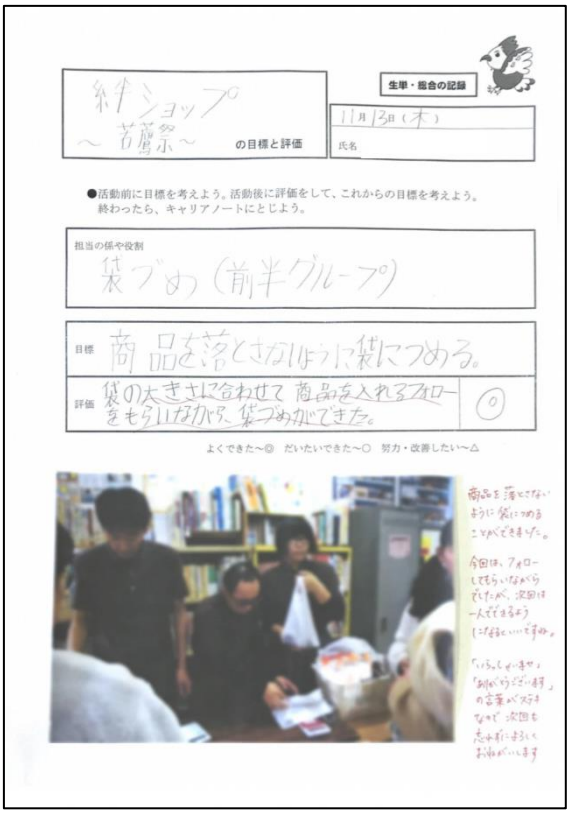
また、地域で開催するショーに向けた準備として、ショーで用いるうちわ用の紙すきやポスター作りを、「リンゴレンジャー」から小学部の児童へ依頼した。こうした小学部と高等部の交流によって、小学部の児童の意欲や使命感を向上させるとともに、高等部の生徒の自己有用感や達成感の向上等キャリア教育の充実につながっている。「かづの校」では、これらの取組を通じて、「児童生徒の人と関わる力を高める授業づくり」を行った。

観点５：
多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5.　キャリアノートの作成・活用（秋田県立比内支援学校たかのす校）

児童生徒が自身の成長などを実感できる工夫として、「たかのす校」を中心に「キャリアノート」(資料６)を作成し、活用した。児童生徒が「絆プロジェクト」(観点４参照)を通じて「何が身に付いたか」を振り返ることができよう、単元に「見通し」「振り返る」過程を配置し、「キャリアノート」を「絆プロジェクト」全体において継続して活用した。

「絆プロジェクト」全体で、「キャリアノート」を事前・事後学習に活用したことで、各学部段階や発達段階に応じて、「何のために」「何を頑張るのか」という目的や目標を見通し、「何ができるようになったか」という頑張り等を言語化し、長いスパンで振り返りができるようになった。また、教師がその都度コメントを記入し、児童生徒に伝えることも、児童生徒の頑張りの意味付けとなり、「何が身に付いたか」という生徒自身の成長の実感を促し、自信につながっている。


生単・総合の記録

絆ショップ ～若葉祭～ の目標と評価

11月13日（木）

氏名

●活動前に目標を考えよう。活動後に評価をして、これからの目標を考えよう。
終わったら、キャリアノートにとじよう。

担当の係や役割
袋づめ（前半グループ）

目標　商品を落とさないように袋につめる。

評価　袋の大きさに合わせて商品を入れるフォローをもらいながら、袋づめができた。　◎

よくできた～◎　だいたいできた～○　努力・改善したい～△

商品を落とさないように袋につめることができました。
今回は、フォローしてもらいながらでしたが、次回は一人でできるようになるといいですね。
「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」の言葉が大きくなって次回も元気に楽しくお仕事がしいます

資料６　「キャリアノート」

すべての児童生徒が自分の目標設定を言葉として表現できたわけではなかったが、文章を書くことができる児童生徒には、自分で目標設定をするようなケースがあった。また、それが難しい児童生徒には、実際の学習中の写真を貼ることで、達成感を実感できるような工夫を行った。また、児童生徒の成長を保護者と共有し、多面的に評価するという視点から、「キャリアノート」の保護者面談での活用も始まっている。